

SSKR

2022.4.No.403

# 障害児を普通学校へ

Japan Alliance for Inclusive Education

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 6-8-7 楽多ビル 3 F

<http://www.zenkokuren.com>

郵便振替口座 00180-0-73366 年会費 4 千円



**【障害のある子の就学・入級など相談受付中！】**

TEL 03-5313-7832、FAX 03-5313-8052

メール [info@zenkokuren.com](mailto:info@zenkokuren.com)

電話の時間は  
巻末の事務局カレンダーを参照

二〇二二年四月七日発行SSKR通巻第九四六五号「障害児を普通学校へ」No.403  
一九九二年四月一七日第三種郵便物認可（毎月三回七の日発行）

## 若い世代へのバトンタッチを念頭に

## 全国連が「共に」のリーダーシップをとっていく決意です

障害児を普通学校へ・全国連絡会 代表 長谷川律子

全国連は、「逆境」に鍛えられている？ …強いのかな？

昨年は、コロナ禍でも東京で全国交流集会とポスト集会を開催できました。そして3月18日～19日には、2022年度の世話人会・総会と2年ぶりの文科省交渉が開催できました。

冷たい春雨が降る議員会館前を歩きながら、ロシアのウクライナ侵攻の情景が浮かんできました。

コンクリートの建物が瓦礫の山となり、寒さで震える市民・子どもたちの泣き叫ぶ声・年配者の狼狽する姿は、我が事のように息苦しさを感じました。どんな理由であれ、戦争は犯罪です。勝ち負けなくお互いに傷つき、内面を取り戻すのに時間がかかります。被爆国としての日本、福島原発事故としてここ2～3年はコロナ禍で学んだ、日常生活・社会生活の問い直しがあります。「共に」は本当に人類的課題で、人の命より大切なものはないとブツブツ（政治家の皆さん、今日本は出番ですよ！）言いながら、会場に着きました。マスクはしていますが、全国の仲間との会話、空気感、何事にも変えたいとしみじみ感じました。

昨年は全国連が取り組んだ国会への「障害者権利条約が規定するインクルーシブ教育の実現を求める請願」を紹介議員へ手渡しました。が、その後の文科省の動向を確認してきませんでしたので、改めて確認したいと思います。

全国連は――

1. 分けられた場で育った子どもたちは共生社会の形成はできません。健全児も障害児も。

2. 障害児のいる家族（家庭）は、障害があっても子育てをしているのです。兄弟・姉妹と家族が知恵を出しながらの子どもが、出会う最初の固まりの集団です。

3. そして、幼稚園・保育園・学校という地域の同世代の子ども集団へと広がります。「共生・共育」は「学び」へと発展し、人格形成には大きな影響をもたらします。と訴えてきました。

文科省交渉は水岡俊一議員のお力添えをいただきました。水岡議員は本会議と重なり、残念ながら交渉の場に出席はありませんでした。文科省へは事前に要請書を手渡ししていたので、その項目に沿って回答がありました。小脇に書類を抱え若い官僚が入室、「エッ！」またか、その姿を見た途端正直がっかりでした。回答も早口でマニュアル通りの言葉で全く心に響かない棒読み。

会場からは、①神奈川県佐野涼将君が4年生になっても就学を認めてもらえず、毎朝昇降口で友達と挨拶を交わすのみで帰らざるを得ないという訴え。②高校受験3年目の雑賀美佳さんは、受験時の受験配慮無しで（鉛筆を持っていないのに、作文をかけ）、人権侵害の行為と言わざるを得ない。たった一人定員内不合格を出された昨日（3月18日）の高校対応を文書にして手渡ししました。私は、この2例について文科省から生身の言葉を引き出せなかった力不足と悔しさで涙腺がゆるんでしまいました。そうですね。官僚たちは分けられた場で育ってきたので、理解に苦しむ訴

えだったのでしょうか。かれらは、出会いやチャンスを奪われたもつたない人生を送るんだと思うことにしました。

昨年の東京集会では、次世代が生まれました。運動のスタイルは背景もあり、変わっていきます。でも変わらないのは、「共に」を追求する「本気度」です。「みんな違っていい」です。そして会報40年史を作成しました。（1981年8月～2021年9月の抜粋）なんで普通学級なのか？ 障害当事者、専門家（医者、法律家、教師：）そして親たちの取り組み、地域の活動など貴重な歴史が詰まっています。

今年度は8月に、国連障害者権利委員会の本審査がジュネーブで開催予定です。全国連はパラレルレポートを提出し派遣団を送り、そこで日本のインクルーシブ教育の実態を訴えます。9月には福岡の久留米で障害児の高校進学を実現する全国交流集会（実行委員会主催）が開催されます。

子どもたちの奪われた一日一日は、誰も取り戻すことはできませんし、子どもの笑顔は活力の源です。全国連は会員の皆さんとつながり、運営委員会を中心に動いています。困難な社会・大変な世界状況となつてしまいましたが、前へ進むしかありません。私自身は、様々な場面で「ハッ」とすることが多くなつてきた年齢となりました。情報社会をうまく取り込み、若い世代へのバトンをタツチを念頭に全国連が「共に」のリーダーシップをとっていか決意で、今年度をスタートします。